

聖霊降臨後第8主日 ルカ10章25―37節

①いのちと行い（25―28節）

〔新共同訳〕

25 すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」 26 イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、 27 彼は答えた。「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」とあります。」 28 イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」

〔直訳〕

25 そして 見よ ある律法の専門家が 立ち上がった、
試しながら 彼を 言いながら、
「先生、 何を 行なって、

永遠のいのちを 私は受け継ぐだろうか」

26 だが彼は 言った 彼に対して、
「律法において 何が 書かれているか
どのように あなたは読むか」

27 だが彼は 答えて 言った、
「あなたは愛するだろう 主を あなたの神を
あなたの心全体から、 そしてあなたの魂全体において、

そしてあなたの力全体において、
そしてあなたの思い全体において、
そして あなたの隣人を あなた自身をののように」。

28 だが彼は言った 彼に、
「正しく あなたは答えた。
それを あなたは行ないなさい そして あなたは生きるだろう」。

② 25節の「行なって」と「いのち」は、28節の「行ないなさい」と「生きるだろう」と対応している。「いのち（ゾーエー）」は「生きる（ザオー）」の派生語である。

③ 律法の専門家は「何を行なって、永遠のいのちを私は受け継ぐだろうか」と尋ねるが、「行なって」は「ただ一度行なって」を意味する分詞形で書かれている。この点を強く意識すれば、律法の専門家はただ一度で永遠のいのちを手に入れることのできる英雄的な行為は何か、とイエスに尋ねたことになる。

④ 律法の専門家は「試しながら立ち上がった」。「立ち上がる」と訳した語は「座っていた者、横たわっていた者が立ち上がる」を意味する。これを「現れた」とする訳もあるが、律法の専門家も皆と一緒に座っていた中で、一人立ち上がってイエスに問いかける。「試す」と訳したエクペイ

ラゾーは「(そのものの本性や性格を知るために) 試す」を意味する。単純に試すときにも、悪意をもって試すときにもどちらにも用いられる。ここでは前者の意味で、律法に通じている学者が、イエスが正しく答えるかどうかを試している。

④ イエスは、律法に「何が書かれているか」「どのようにあなたは読むか」と問いかける。「読む」と訳した語を「唱える」の意味に取る説もある。その場合は、「日々の礼拝で何を唱えているか」の意味であり、「シエマの祈り」(申六4-5の信仰宣言)を指すとされる。一般的にはここでの「読む」は「解釈する・理解する」の意味に取られている。

⑤ 27節は申命記6章5節とレビ19章18節後半からの引用。「愛するだろう」は命令を表す未来形。「心・魂・力・思い」は精神のあり様を細く区分したというよりは、精神生活全体が一緒になつて神を愛するべきことを表している。「あなたの神、主を愛しなさい。そしてあなたの隣人をあなた自身をのように」と述べ、後半は動詞を省略している。神への愛の一つの側面として隣人への愛を捉えているためと思われる。

⑥ 「隣人(プレーション)」は、「近所に住む人(ペリオイコイ)」(ルカ158)よりは広い意味を持ち、「関わりを持つべき人」を表す。「隣人」をどの範囲までとするかは、常に問題とされた。レビ19章18節では、

復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。
自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。

とあり、「民の人々」と「隣人」が並行句となっているので、「隣人」はイスラエルの同胞を指す。しかし、レビ19章34節では

あなたたちのもとに寄留する者をあなたたちのうちの土地に生まれた者同様に扱い、自分自身のように愛しなさい。なぜなら、あなたたちもエジプトの国においては寄留者であったからである。わたしはあなたたちの神、主である。

とあるように、パレスティナ在住の外国人も隣人に含まれている。また、フアリサイ派には律法遵守を行なえない一般の人々を「隣人」から排除しようとする傾向があった。

⑦ 「あなた自身を愛するように」の解釈は分かれる。自己愛を肯定した上で、「隣人を自分自身のように愛しなさい」と命じているのか、あるいは、自分への愛の深さを引き合いに出しているだけなのか、議論されている。

⑧ 28節の「行ないなさい」は、「行ない続けなさい」を意味する形で書かれている(37節も同様)。ここでも動作の継続が指示されているのであれば、25節の「行なって」は一回的な行為を表しているのに対して、イエスは継続的な行ないを命じていると見ることが出来る。律法の専門家は「正しく答えた」。しかし、それを行なうことができるかどうか重要である。

⑨ イエスは「それを行ないなさい、そして生きるだろう」と命じる。レビ18章5節「わたしの掟と法を守りなさい。これらを行う人はそれによって命を得ることが出来る。わたしは主である」では、神の戒めを守る者に、命が約束されている。律法を知識として知るだけではなく、律法に込められた神の思いを行なうとき、人は永遠のいのちを受け継ぐことになる。

⑩ どの時代から、神への愛と隣人愛が結び合わされ、ユダヤ教伝承に定着したのかははっきりしな

い。マタイ22章34節以下やマルコ12章28節以下では、イエスが「神への愛と隣人愛」を最も重要な掟として答えている。マタイやマルコでは最も重要な掟は何かを問題としているが、ルカではいのちを受け継ぐ行為は何かに重点がある。

②隣人とは誰か（29節）

〔直訳〕

29 だが彼は 望んで 自分自身を正しいとすることを、

言った イエスに対して、

「そして 誰で あるか 私の隣人は」

〔新共同訳〕

29 しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と

言った。

①「正しいとする」は、ここでは隣人愛を行なわない自分を「弁護する」、隣人愛を行なわないのは、隣人が誰であるかが分からないからであると言うため。あるいは、25節で「何を行なって、永遠のいのちを私は受け継ぐだろうか」と尋ねた自分を「弁護する」の意味。後者の場合、25節の問いは27節で簡単に答えることができるものだったが、意味のある重要な問いであるとイエスに分からせるために、「弁護しようとして」の意味になる。

②「私の隣人は誰であるか」という問いは、隣人の範囲を決め、その中に入る人だけを愛するという発想につながる。新約聖書の時代に近づいて民族主義が高まるとともに、他民族は隣人から除外されてしまった。律法の専門家が問い返したのは、このような背景があるためである。

③見て、憐れに思った、そして近づいて（30―37節）

〔新共同訳〕

30 イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。31 ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。32 同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。33 ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、34 近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。35 そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもつとかかったら、帰りがけに払います。』36 さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」37 律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

④30―37節は五つの小段落に分かれる。直訳に示したように、30節と36―37節は「強盗」で対応している（aとa'）。31―32節では「反対側を通り過ぎて行く」を二回、34b―35節では「世話をする」を二回用い、同じ動詞の繰り返しによって対応している（bとb'）。aとa'、bとb'が対応し、cが中心となる。その中で核となる言葉は、「見て、憐れに思った、近づいて」である。

【直訳】

30 受け取って、 イエスは 言った、

「ある人が 下って行った エルサレムから エリコのほうへ、
そして 強盗たちに 彼は出会った。

ところの そして 彼を剥いで そして 打撃を加えて、
立ち去った、 半死半生のままにして。

a

31 だが偶然の下に ある祭司が下って行った その道において

そして 見て 彼を、 彼は反対側を通り過ぎて行った。

b

32 だが同じように レビ人もまた 「現れて」

場所の下に 来て そして見て、反対側を通り過ぎて行った。

33 だがあるサマリア人が 道を行きながら 来た 彼の下に

そして 見て、 彼は憐れに思った、

c

34 そして 近づいて 彼は包帯をした 彼の傷に、

上に注ぎながら 油を そして ぶどう酒を、

だが彼を乗せて 自分の家畜の上に、

彼は連れて行った 彼を 宿屋の中へ、

そして 彼は世話をした 彼の。

そして 翌日の上に 取り出して

彼は与えた 二つのデナリオン銀貨を 宿屋の主人に、

b'

そして 彼は言った、

『あなたは世話をしてください、彼の、

そして なんであれ あなたが余計に費やしたなら、

私が 私が戻って来ることにおいて 払うだろう あなたに。』

36 これらの三人の誰が 隣人に、 あなたに思われるか、

なつたと 強盗たちの中へ落ち込んだ者の。」

37 だが彼は 言った、

「行なった人が 憐れみを 彼に対して」。

a'

だが言った 彼に イエスは、

「あなたは行きなさい、

そして あなたは 行かないなさい 同じように」。

⑥祭司は「彼を見て、反対側を通り過ぎて行った」。当時、祭司は24のグループに分かれて、エルサレム神殿で勤めに就いていた。祭司グループの勤めは一週間続く輪番制だったので、年に二回、神殿で働いたことになる。エリコには祭司グループの居住地があったのかもしれない。そうであ

れば、神殿での勤めを終え、家路を急ぐ祭司であっただろう。

㉓ レビ人は「場所の下に」来たが、サマリア人は「彼の下に来た」。レビ人は強盗が現れる場所の下に来て、そこが危険な場所であると気づき、反対側を通り過ぎて行く。レビ人の目は倒れた人には向かわない。しかし、サマリア人は傷ついた人の下に来て、「見て、憐れに思い、近づく」。

㉔ 強盗に襲われた人はおそらくユダヤ人だと思われる。地位ある祭司やレビ人は助けを必要とする同胞を見過ごしにするが、ユダヤ人がほとんど異邦人と見なして軽蔑していたサマリア人は彼を助けるために行動を起こす。「見て、憐れに思う」サマリア人は危険を顧みず「近づいて」行く。

㉕ 「憐れに思う（スプランクニゾマイ）」の新約聖書での用例は12回であり、そのうち9回はイエスの業が憐れみに基づくことを表す。残りの3回はたとえの中で、借金を返せない僕を「憐れに思い」、彼を赦して帳消しにする主人、帰ってきた息子を見つけて、「憐れに思い」、走り寄る父親に用いられている。これらのたとえの主人と父親は、人を憐れむ神を表していると思われる。そのことを考えると、善いサマリア人は永遠の命を手にする模範的なキリスト者を表す以前に、人の命を救うイエスと神を表しているだろう。

㉖ ルカ福音書では、「ナインのやもめの一人息子の蘇生」「善いサマリア人」「いなくなった息子の帰りを喜ぶ父」のたとえに、「見て、憐れに思い、近寄って」という同じ言い回しが用いられている（七13―14、一〇33―34、一五20）。神の愛は「見て、憐れに思い、近寄って」、傷ついた人を命の危険から助け出し、生きる術を失った人を迎え入れて命を守ること、神の憐れみは、それを受けない限り、生きる場を失う者に一方的に与えられることをルカはこの表現によって表す。

㉗ 29節では「私の隣人は誰か」という問いであったが、イエスは「誰が隣人になったと思うか」と尋ねる。「強盗たちの中へ落ち込んだ者の隣人になった」のは、同胞ではなく、サマリア人である。同胞であるか否かではなく、「見て、憐れに思う」心が、人を隣人とする。律法の専門家は「憐れみを行なった人」と答えて、隣人となるために必要なものを端的に言い表している。

㉘ 37節の「行ないなさい」という命令形には、反復継続の意味が込められている。ここでは「あなた」が強調されている。35節の6行目「私が」も強調である。これと対応しているのだろう。「ほかの誰でもない、私が払うだろう」に対応して、「あなた自身が行ない続けなさい」と命じている。助けを必要とする人の隣人になるのは、ほかの誰かではなく、「あなた自身」である。「私の隣人は誰か」と言って、行動を起こさないう者ではなく、「隣人になる」「憐れみを行なう」という生き方を続けていくことが求められている。

④ 申命記30章9―14節

9 あなたの神、主は、あなたの手の業すべてに豊かな恵みを与え、あなたの身から生まれる子、家畜の産むもの、土地の実りを増し加えてくださる。主はあなたの先祖たちの繁栄を喜びとされたように、再びあなたの繁栄を喜びとされる。10 あなたが、あなたの神、主の御声に従って、この律法の書に記されている戒めと掟を守り、心を尽くし、魂を尽くして、あなたの神、主に立ち帰るからである。

11 わたしが今日あなたに命じるこの戒めは難しすぎるものでもなく、遠く及ばぬものでもない。12 それは天にあるものではないから、「だれかが天に昇り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。13 海のかなたに

あるものでもないから、「だれかが海のかなたに渡り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。14 御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる。

④神は「再びあなたの繁栄を喜びとされる」（9節）が、それは「あなたが主の御声に従って戒めと掟を守り、心を尽くして、主に立ち帰る」からである（10節）。しかし、イスラエルは自分の力で主に立ち帰るのではない。6—8節に、

あなたの神、主はあなたとあなたの子孫の心に割礼を施し、心を尽くし、魂を尽くして、あなたの神、主を愛して命を得ることができるようになってくださる。…あなたは立ち帰って主の御声に聞き従い、わたしが今日命じる戒めをすべて行うようになる。

とあるように、立ち帰ることができるのは神が人の心に割礼を施したからである。神が「心に割礼を施す」とき、心の働きを妨げていた覆いが切り取られ、心の本来的な機能が回復されるので、神の「戒めをすべて行うようになる」。戒めを実行させる力は、人間の努力というよりも、神の働きかけにある。

⑤ 1—10節は、3—5節に「あなたの神、主はあなたの運命を回復し、あなたを憐れみ、…再び集めてくださる。…かつてあなたの先祖のものであった土地にあなたを導き入れ…」とあるので、捕囚の最中に語られていると思われる。一方、11—14節は、もともとは1—10節よりも前に存在し、人間の可能性を強く信頼していた時代の言葉だったと見られる。14節の「御言葉は…あなたの口と心にある」は、6章6—9節「今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、子供たちに繰り返し教え、…これを語り聞かせなさい。更に、これをしるしとして自分の手に結び、憶えとして額に付け…」を念頭においた表現だと言える。日ごろから神の戒めを「口」を用いて子供に語り聞かせ、「心」を用いて記憶に留めているのだから、それを行うことができるのと主張になっているからである。

⑥しかし、人間の努力よりも前に、人の心に割礼を施し、戒めを行わせようとする神の働きかけに重点を置く1—10節と結びつくことによって、14節の「口」と「心」は、心に割礼を施された者の口と心であり、「行うことができる」のは「神の働きかけに促され、行うことができるようになる」からだとして理解されることになる。

⑤神が隣人となっていると知る

神は傷つき倒れる者を見過ごしにすることなく、「見て、憐れに思い、近づいて」隣人となってくれている。この神の愛に出会うとき、人は傷つく人の「隣人となる」ことができる。それは神の思いを知って生きることであるから、永遠のいのちを生きるようになる。申命記は、神が人の心の覆いを取り除いたから、神に立ち帰り、戒めを行なうことができる」と語る。律法は人が生きるべきいのちを指し示すものである。この律法を人が守ることができるように、神が先に働いている。

神の憐れみを知り、神を愛する者は、その愛に応えて、神の愛を分かち合うために隣人を愛する。憐れむ神が来ていることを語る「善いサマリア人のたとえ」も、神への愛と隣人への愛は不可分であり、神の愛に支えられて、人は愛する者となることができると教えている。